

自然は私たちにたくさんのことを教えてくれます。

私は人材開発のコンサルタントとして、これまで六千件を超える多様な講演、研修の企画に携わってきました。その経験の中で、自然を用いた比喩はひとときわ人の心に響き、動かす力を持っていると注目していました。

その気づきから「自然が教えてくれる仕事と、人生で大切なこと」をコンセプトにした書籍『プロ講師が使っている朝礼・スピーチの「つかみ」話材』を上梓いたしました。今回はその中から、家族に関する比喩や、人生に役立つ比喩を書かせていただきます。話によって違った受け取り方になり、一貫していないところもありますがご容赦いただきたい。人生に唯一絶対の答えはなく、多様な考えを複眼的に見ることが大切です。「そんな考え方もあるのか」と気楽に読んでいただければ幸いです。

渡り鳥に見る家族の協力

渡り鳥が集団でV字になって飛んでいるところを見かけますよね。この風景は雄大で実に美しいものです。

しかし、なぜあのような編隊を組んでいる

自然が教えてくれる大切なこと

——家族のあり方を学ぶ

人材開発コンサルタント あ た ぎ 安宅 じ ん 仁

昭和41年（1966年）丙午年生まれ。業界最大の講演・研修企画コンサルティング会社で6000件を超える企画に携わった人材開発コンサルタント。膨大な数の成功者、その道のプロとの交流から、自然に学ぶ仕事と人生の思考法、意思決定の有用性を感じ研究する。2008年同コンセプトをまとめた書籍『プロ講師が使っている 朝礼・スピーチの「つかみ」話材』（日本実業出版社）を上梓。その他、共著書に『プロ講師になる方法～講演は自分を活かす新しい舞台だ！』（PHP研究所）



特集 道徳は家庭から——身近な人こそ大切に

のでしょ……。

実は、V字になることで斜め前の鳥の羽から翼端渦よくたんうずという気流ができます。後続の鳥たちは斜め後ろでその気流に乗って楽に飛ぶことができ、これにより、一日に百キロを超える旅ができるそうです。これは単独で飛行するよりもはるかに長い距離になるのです。

つまり、長く厳しい旅を最小限のエネルギーで飛ぶ工夫として生まれたのが「V字編隊」なのです。

私たちの一番身近なチームは家族です。常に一緒に活動する必要はありませんが、いざという時にはチーム一丸とならなくてはなりません。家族というチームで、みんなにいい流れが伝わっていく編隊をつくり、チーム内に翼端渦を発生させるのです。

最も重要なことは、渡り鳥は決まったリーダーが常に先頭を飛んでいるわけではないということです。実際、先頭の鳥は翼端渦に乗れないので大きな負担がかかります。先頭が疲れてしまえば速度は低下しチームとして良い飛行ができなくなるのは当然でしょう。そのため、先頭は時折交代して、それまで先頭だった鳥は楽な位置に移っているそうです。

これは、家族でも同じです。

誰か一人のリーダーが過度の負担を抱えて



迷走してはチーム全体が不安定になります。それぞれの得意分野で先頭を変わりながら、後続にいい気流を送るほうが良いでしょう。

家族のリーダーとして常に先頭に立ち、強い風を受けるから信頼されるとは限りません。その時々で先頭を走らせる家族を選択し、信じて任せること。つまり編隊全体をコーディネートすることのほうがリーダーにとって大切なことです。

渡り鳥の「V字飛行」は、家族のあり方を見せてくれます。

キクに見る 撫でてはぐくむ家族の絆

ご存知でしょうか。キクの栽培の過程には、



「撫でる」という行為を入れることがありま
す。植物は、撫でて刺激を与えると茎が太く
なる性質があります。毎日優しく撫で続ける
ことで、茎は次第に太くなっていくというの
です。さらに、苗のときに上部を撫でてあげ
ると、ばらばらだった成長が揃ってくるとも
いわれます。

また、植物は話しかけることで成長が早ま
るといふ説もあります。その際、前向きな言
葉をかけるとより良いそうです。サボテンに
優しい声で語り続けたら、敵でないことを察
知して、トゲが柔らかくなったという話もあ
ります。

人は、言葉かけと接触によって共感し、成
長します。家庭に置き換えると、心の触れ合
いによって絆が深まるとも言えるかもしれま
せん。

家族は同じ時間を共有しています。その中
で自分に関心を持ってもらっていると感じるこ
とから、信頼関係は生まれていきます。

例えば、忙しくて家族とゆっくり話す時間
がない方。どんなに忙しくても、毎日ひと言
でもいいから、家族との会話を欠かさずに続
けてみてはいかがでしょう。「おはよう」の
後にもうひと話しかけることは、それほど
難しいことはありません。

また、例えば家族に対して厳しい言葉をか
けてしまう方。相手を反発させ、トゲをます
ます固くさせているのは、もしかしたらあな
た自身なのかもしれません。

声かけやコミュニケーションを深めること
でサボテンのトゲが柔らかくなるように、も
っとコミュニケーションを取ってみませんか。
愛情を持って触れることで茎が太くなるよう
に、愛情で家族の絆をより太くしていきまし
よう。

セミの羽化に見る 成長の機会

私は幼少時代にセミの幼虫をつかまえ、自
宅のカーテンに止まらせ、羽化を観察したこ
とがあります。夜になると幼虫はカーテンに
つかまり羽化していきました。

その姿は実に美しく、真っ白なセミが幼虫
の背を破って出てきました。しかし動きはと
てもゆっくりで、時折動きが止まります。幼
い私は助けてやろうと殻をそつと広げてみま
した。ところが、その感触は予想外に柔らか
く、なんとなく良くないことをしたと感じた
私は、その場を離れて布団にもぐり込んで寝
てしまいました。

特集 道徳は家庭から——身近な人こそ大切に

翌朝、セミは脱皮を終わっていたものの、羽がくっついて飛べない状態でわが家の畳の上を這はっていました。明らかに、脱皮のタイミングで私が触れたからでした。

セミにとって羽化は、六年も地下で過ごし、最後の残り少ない命を使い、飛び立つための大切なプロセスであったのに、とても悪いことをしたと落ち込みました。

これは人間と同じではないでしょうか。あなたは、子供や孫の成長機会を奪っていることはありませんか？ 何かの挑戦中にうまくいかずに悩んでいたら、手伝ってやりたくありません。もちろん、よかれと思ってやることでしょうが、試行錯誤して乗り越えることは成長するための大切なプロセスです。

時には遠回りをしなくてはいけないときもあります。苦戦している家族を見れば近道を教えてやりたくありませんが、それが後に本人のためにならないこともあるのです。

セミは長い地下での生活を経て最後に地上で最大の革新をします。人間も多くの経験や危機を乗り越えながら自らみずか気づき成長していきます。

子供たちの成長機会を奪ってはいけません……私は幼少時代の「セミへの大きなお世話」からそう思えてなりません。

生き物は常に進化することが出来る

キリンは高い木の葉を好んだため、首が伸びたという説があります。首が長いから高い木の葉を食べるのではなく、高い木の葉を食べることを決めたから、首が長くなったそうです。

クジラは人間と同じ哺乳類ほにゅう類ですが、泳ぐために前足をヒレに変えました。

ペンギンは鳥類ですが、早く泳ぐために翼をヒレに変えました。

ゾウは巨大な体でしゃがまずに、水やエサを食べるために鼻が長くなりました。

弱く狙われやすいウサギは、耳を大きくして音に敏感になり、敵の接近を避けました。生物はよく使う器官は発達していき、使わない器官は退化していくそうです。生きていくために効果的な体に変えていったのです。

人間も、脳は使えば進化し、使わなければ退化しますし、体は運動をすれば若返り、怠ければ老化していきます。自然界と同じように私たちも、自分を変えていくことができます。ぜひ、生涯学習、運動習慣を心がけ、いつまでも成長、進化していつてください。それが家族の願いです。



それぞれの家族に それぞれの正解がある

最後に、自然とは関係ありませんが、私の母の話をさせていただきます。

二〇一一年に逝った父を母は十年以上献身的に介護してきました。

特に最後の二年は寝たきりで食事もとれず、胃瘦（食物を腹壁から直接流入する）や痰の吸引などの医療行為まで自宅でこなしていました。

母自身が高齢です。

私は母に言いました。

「もう自宅で介護するのは限界じゃないか」

しばらく黙ってから母は話し出しました。

「私ね、子供の時は看護婦さんになりたかったの。でもお母ちゃんに『あんたは泣き虫やから無理や、やめとき』と言われたんよ……」

だから今こうしてると、夢が叶ったと思えるんよ……」

私は反論する言葉を失いました。静かな話し方の中にも、最後まで自宅で自分が看るといふ覚悟と、もうこれ以上は言うなという迫力がありました。

その後、父を見送りしばらくは気持ち的にも体力的にも疲れを見せたものの、今は以前からやっていた絵画や川柳に加え、料理や運動など新しい学びに元気に参加しています。その姿には、父に対してできることはやりきったという納得感があるのだと感じます。

もちろん、私は必ずしも自宅で家族が介護をするべきとは思っていません。家族に過剰な負担がかからぬように外部の支援を受けるべきと考えています。それぞれの家族に、それぞれの正解があるはずですよ。

実は本稿の執筆依頼を受けたとき、最初は読者層を伺い躊躇しました。私の自然からの比喻は主にビジネス思考への展開だからです。でも母に向かって書いてみようと思って書き出した結果、最後に母のエピソードを加えさせていただいた次第です。

本稿が皆様にとって何かのヒントとして残れば幸いです。最後まで読んでいただきありがとうございます。感謝。

特集 道徳は家庭から——身近な人こそ大切に